

明治維新「異説」、民のための改革。

「地域と労働運動」2014年10月号掲載

2014年10月8日

郵政ユニオン長崎、中島義雄

1、はじめに

世界は2008年9月15日のリーマンショックから大恐慌時代に入り、日本では、「現代は明治維新や敗戦時に次ぐ、第三の開国的な大動乱の時代だ」という。世界では多くの国家が財政不安を抱え、再編の渦中にあり、日本の危機も確かに深刻だ。

しかし、日本の明治維新や戦後改革は、構造的変化からも日本史上まれな大転換の出来事であった。だが、この二つに共通した現象は、政治的には権力者が交代したこと。そしてその土台では経済的な富の偏在を正したこと。さらにその原点が、「国民のため」という視野があったことが、いくつか確認できる。

ところが現代の改革では、国の危機の根が富の偏在にあること。そしてその解決が「国民のため」になされるという本質的なことが語られていない。そうしたことを踏まえて、私たちの「改革」と「闘い」とはなにかを、過去のそれと比較しながら考えたい。

だが、今回取り上げる明治維新史では、一般に語られるものとは少し違った「異説・明治維新」であることを、はじめにお断りしたい。

2、明治維新と廃藩置県

、明治維新とは

明治維新とは、政治的には1192年から始まった鎌倉時代以降の武家政権を打倒し、700年ぶりに国家主権を天皇が握った政権交代である。しかし政治は経済が決めるわけで、封建制度の経済が、新しい時代の経済制度に対応できなくなった結果の政治劇である。

徳川幕府を打倒し、新政府をつくる = 明治維新が革命だとするなら、本来、国の主人公は誰か。誰がなんのために闘い、いかなる国を作るのか、など、民衆サイドから整理されるべきことは多いが、このとき、国の経済を根底で支えてきた生産力の担い手である多数派の農民に、国を変える（革命）という意識は芽生えていなかった。（多発した一揆は、幕府打倒の意思表示ではあったが）

しかし、1854年の開国 = 日米和親条約締結から1868年の明治維新までの14年間の国内対立、内紛の間にも、世界は産業革命（蒸気機関と鉄製大砲と

電話の発明など)による、世界再編(植民地侵略支配)の時計の針は進む。

確かに政権中枢の徳川幕府は、権力と情報を独占的に入手していた。交易国のオランダが年に2回さし出す情報解説の「オランダ風説書」により、当時の世界情勢(ナポレオンの欧州支配)などから、圧倒的な軍事力、経済力を持つ諸外国と、日本の力関係も十分に認識できていた。それまでの幕府は、アジアの先進国=明との交流を窓口に動いていた。その明が、イギリスの自由貿易要求のもとにおきたアヘン戦争で敗北し、いとも簡単に半植民地化に置かれたことへの衝撃は驚きであった。

その結論が、幕府による非戦、開国=条約締結と開港、交易の決断となるのである。だが、徳川政権はその締結した不平等条約の結果、新たな大波をまともに受ける。金と銀との不当な交換ルートで、銀の大量流失を招き、また交易の結果の超インフレの前に、経済が大混乱し、幕府は急速に権力基盤を失い、自壊しつつ、尊王方に打倒されたのである。

幕末期の権力闘争はおおむね4派からなる。徳川幕府方が、尊王(天皇)方が。そしてそれぞれが、開国か否(攘夷)かである。結果は尊王・開国となるのだが、当初からこれを一貫して唱えていた人たちは少なかった。一口で言えば、230年の長い鎖国に慣れ、外国を意識しなかった日本人たちは、だれも先の世界を読めなかったのである。(坂本竜馬ファンの方には申し訳ないが、維新・開国の始まりであるペルー来航のころでいうと、彼の力と存在はドラマほど大きくない)

そもそも尊王の象徴=孝明天皇こそ、攘夷(外国船を打ち払い)を強く主張しており、だからこそ、開国勢力から「毒殺された」と噂されたくらいだし、なによりも尊王の代表である長州藩や薩摩藩にしても、將軍慶喜との密約での攘夷実行で、イギリス軍艦などを砲撃し、逆に反撃を受け、町中を焼き払われる敗北を体験し、彼我の力関係を思い知り、非戦・開国派へ転じるのである。

、大政奉還と王政復古のクーデター

1867(慶応3)年10月14日、ときの將軍・徳川慶喜は大政を奉還し、その権限を天皇に譲る。しかし、維新の新政府派は、徳川の復権を恐れ、一気に幕府打倒のために、12月9日に王政復古というクーデターを実行し、幕府勢力を京都から一斉に追放する。

それ以降、維新派は新政府を樹立し、多くの改革を次々に行うが、最大は廃藩置県であった。政治的には江戸末期、日本(徳川幕府)は275の藩による分割支配の連合国家だったが、その国=藩を解体し、305の府県に置き換え、藩主を知事とする策であった。松尾正人著の「廃藩置県」には、「このとき=1871(明治4)年7月14日、岩倉具視と大久保利通は『何分にも意外な大変革で、王政復古のクーデターに臨んだときと同様の決死の心境にある』と語っている」と書かれている、大名らの領地返還=石高の廃止、武士の秩禄返還は、文字通り一大革命であり、だからこそ土族の反乱が全国で起きる

のである。

、幕府財政の破綻と天保の改革

当時の全国的な石高には様々な資料があるが、ここでは日本全体の国民総生産的としては 1300 万石という数でみる。徳川幕府は 300 万石を握り、全国の 3 割弱を独占し、さらに 300 人の大名と 50 万人余りの武士階級がその富を絶対権力として握っていた。

しかし、徳川幕府の財政は完全に行き詰まり、財政改革が求められた。歴史では大老・水野忠邦が行った天保の大改革が有名だが、結局は締めつけ＝デフレ策で、国民の支持は得られず、改革は失敗し、幕府財政はさらに弱体化する。これは諸藩の経済事情もまた同様であった。

財政の実態だが、幕府がその命運をかけた長州征伐や鳥羽伏見の闘いの際、その戦費がまかなえず、大阪の大商人に 200 万両の借財をお願いするしかないのが実態であった。

また一例だが、琉球、中国などとの密貿易で、わりと楽であったとされる薩摩藩でも、年収 18 万両の藩財政に比し、累積負債総額は 500 万両であったという。そこで薩摩藩では、藩財政再建のために、250 年間という気が遠くなるような長い期間に元金だけ返済する（借金踏み倒し）策を強行し、自藩だけの財政を建て直す。

もうひとつ、佐賀藩で見る。この藩は天保の改革で財政再建をなしたとされる数少ない藩のひとつだ。佐賀藩は江戸時代の経済特区＝長崎・出島を警護し、長崎周辺を藩領としていた。そしてその長崎交易の利益から、かなり裕福とされた佐賀藩ですら、当時の藩財政の半分は借金であった。

のち、明治維新で活躍する藩主の鍋島閑叟（直正）にたいして、改革を進めた藩の指南役の古賀穀堂は、「民が富めば結局は藩も豊かになる」との施策を進言する。藩政改革では「均田制」を基本として地主の集積を防ぎながら、農民の利益を優先し進められた。結果的に埋め立てなどが飛躍的に進み、それまでの 37 万石の石高が、実収入は 100 万石へと伸びたともいわれる。こうして佐賀藩や薩摩藩は西南の雄藩へと飛躍し、統幕へ時代が大きく動き出す。

、閑話休題、鍋島閑叟が国を守った。

私は肥前の国（佐賀）の生まれであり、佐賀「鬮盾」であることは間違いないが、佐賀の人々のことを少し、閑話休題的に書き加えたい。テーマは「国民のための改革」である。

明治維新の新政府の 4 役のトップ（輔相）は、三条実美（公家出身）である。つづく議定の 3 人のうち 2 名は岩倉具視と徳大寺実則の公家出身である。残る 1 名は佐賀藩主の鍋島閑叟であり、幕府方では彼一人である。「幕末維新と佐賀藩」を書いた歴史家、毛利敏彦・元九州大学教授によれば、この新政府を「岩倉と閑叟の連立政権」と書く。大久保や板垣、後藤らみんなも、その下の役＝参与であり、閑叟の位置は極めて重要であったが、2 年後の明治 4 年、彼は佐幕の思いを残しつつ、病死する。

この閑叟が歴史の表舞台に登場するのは、1853（嘉永 6）年のアメリカ艦隊のペルー提督による黒船来航のときである。ときの老中首座であった阿部正弘は、将軍・家慶の死去という大混乱のなかであったが、急きよ佐賀藩主の鍋島閑叟へ、江戸湾の警護として、台場に鉄製大砲 200 門の設置を要請する。長崎（出島）警護の 200 年の歴史を持つ佐賀藩は、いち早く西洋文明とその強大な軍事力に触れながら（閑叟はオランダ軍艦に初めて乗った人）このときすでに自前で鉄製大砲製造技術を持ち、事実、長崎港入口の神の島などに、15 門の大砲を備えており、外国船対策をとっていた実績による。閑叟は直ちにこれに応じ、50 門を品川に備えたと歴史書にはある。

ちなみにロシアの開港要求に対して、長崎での交渉役として派遣された勘定奉行の川路聖謨は、長崎で、この佐賀藩の大砲の実弾演習を検分し、驚き、老中に報告し、幕府はその後、砲台建設や、反射炉の建設に着手し、佐賀藩の職人の指導で 5 年後に完成させるのである。

いま思えば、ペルー来航のときの軍事力の示威に負けず、和親条約締結、開国へとつなげて日本を守った第一人者は、老中・首座の阿部正弘である（「幕末政治家」・福地桜痴）が、陰の主演は、佐賀藩主の鍋島閑叟や、佐賀藩の先進的な人々だったのだと、160 年も前の話だが、歴史の面白さを感じる。

、江藤新平の「国民のための改革論」

この鍋島閑叟の懐刀であり、閑叟の後押しで、明治政府に出仕する江藤新平は、新政府の法相や文部大臣などの要職に就き、国民皆学を提唱し、民法制定でも、日本史上になかった「民の権利」の文言を法に残すなど、明治維新の大改革には、彼の功績が大きい。（このことなどは、明治初期の法務官僚であった穂積陳重の「法窓夜話」（岩波文庫）に詳しい）

わが国で初めて「国民」という言葉を使った江藤を、毛利教授は我が国の「人権の父」と称える。江藤は、明治政府の基本として、「国の富強の元は国民が安心して生活できることと、国民各人の権利義務を国家の責任で確定し、保障することが先決だ」と語り、「あたらしい国づくりの鍵は、まさに司法の整備による人権の確立にある」とした。（同、幕末と佐賀藩）より。これこそ、佐賀藩財政再建のときの基本、民が優先という思想であった。

付言すれば、この江藤新平も明治新前 8 年前の 1862 年に脱藩し、政治の渦中の京都へ出向き、新たな息吹と思想を身につけるが、佐賀に帰り捕えられ、本来には死罪のところを、京都で書いた最新の情勢文である「京都見聞」が閑叟の目にとまり、その優秀さから、閑叟に助命されて永蟄居で済まされ、明治維新後も生き残り、中央政界で活躍するが、佐賀の乱で大久保利通に無念にも処刑される。

ともあれ、藩の廃止と武士の秩禄返還で、富の集中を廃止し、国民のために四民平等をめざした江藤らの改革は、封建制度の徳川幕府を打倒するが、民のための改革としてはとん挫する。その後日本は産業革命で急成長し、資

本主義社会へと変貌する。その基本は富国強兵とアジアへの進出が国是となり、戦争の時代となる。

、農民一揆の歴史

その維新のとき、日本の全人口の約 3000 万人の 95% を占めた農民はどうしていたのか。無論、彼らも闘っていた。一揆の歴史本によれば、江戸年間から明治初期までに 695 回の一揆がおきている。なかでも幕末とされる 1840 年代からの 30 年間には、207 回の一揆が闘われ、わけでも維新前後の 5 年間には 87 回の一揆が続発している。この幕府や新政府への農民の反乱こそ、社会を変える地底のマグマ的な力であり、これが四民平等の改革をめざす政治を求めた。しかし残念ながら、農民の反乱だけでは政治的主人公への復権はならず、民主化もつぶされていく。

3、戦後改革と農地解放

明治維新から 77 年後の 1945 (昭和 20) 年 8 月 15 日、再度、日本は大転換期を敗戦という苦境の中で迎える。連合軍の (GHQ) の支配を受けた日本の改革 = 封建制度解体と民主化は、その GHQ の外圧的な指導の下に進む。

政治的には、国民は戦後平和憲法で日本史上初めての主権を獲得し、一方、経済的には当時の国民の大半を占めた農民の復権が、農地改革 = 農地解放で進む。

明治から昭和 20 年の敗戦まで、日本はアジアではいち早く産業革命に成功した新興工業国家ではあったが、国内経済の基礎は、やはり農業であった。その働き手は小作農民であったが、圧倒的な富は不在地主という富裕層へ集まる仕組みであったことから、戦後民主化の経済改革の基本はここにあった。

当時の日本は全体の農地 (193 万町歩) を、237 万人の大地主が独占していた。この不在地主には、一町歩の所有を認めたが、そのほかの農地を国が買い上げ、それを 475 万人の小作農民に譲り渡し、全農地の 9 割が自作農地となる。いわゆる農地解放であった。ここでも富の解体 (富裕層 = 地主の富の剥奪) という GHQ による外圧的な政治的強権が発動されて、初めて時代が変わったのである。

これは日本政府と国民の力だけではないが、しかしこれを支ええたのが、戦後の労組結成 (全労働者の 5 割が参加) と、続発したストライキの力が背景にあることは当然である。

しかし、おりからの東西冷戦という流れのなか、日本はアメリカの政治的力で、アジアの社会主義化 (赤化) の防波堤と位置づけられ、民主化の改革が止まり、逆に、反動の流れとなるレッドパージ = 労組解体の攻撃が始まり、保守の攻勢の時代が始まったのも歴史的事実であるが、戦後改革は、国民主権と労働者の権利回復に、大きく影響した「国民のための改革」となっていた点は見逃してはならない。

4、民のための改革で大きな統一戦線を

明治維新・異説として「民のための改革」を考えてみた。

現代が明治維新、戦後改革に次ぐ第3の改革であるならば、その過去に学ぶべきである。この二つは国民（働く人）の生活の安定という路線が一部であるとしても、その根底にあった。したがって今回の改革は、危機の根が富の偏在にあるのだから、これを正す＝富裕層の富の解体が、国民のための改革として実行されてこそ、初めて真の改革といえる。

しかし、これと闘うべき働く人の現実には、労組も政党も四分五裂状態であり、各個撃破されていくままにある。いま、現代の反動的・王政復古、クーデター的な改憲攻撃の安倍政治と闘う、「民のための改革」という大きな統一戦線の流れをなんとか作り上げ、急に吹き始めた国会解散風を受けて立つ布陣をつくる必要が急務である。歴史の曲がり角に闘うものとして、私たちはどう生きるかが問われているのである。